

砕かれた

ハリルホジッチ・プラン

日本サッカーにビジョンはあるか？

五百蔵容

緊急出版

誰が
この**名将**を
殺したのか？

戦略と戦術の徹底検証から鮮やかに
浮かび上がる悲劇の構図とは。

©Gettyimages

砕かれたハリルホジッチ・プラン

日本サッカーにビジョンはあるか？

五百蔵容

星海社

131



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに ハリルホジッチとは何者だったのか？

2018年4月9日。公益財団法人日本サッカー協会（以下JFA）の田嶋幸三会長より、サッカー日本代表監督、ヴァイッド・ハリルホジッチの解任が発表されました。同年6月15日に開幕戦を迎えるロシアW杯へ残すところわずか2ヶ月弱、最終準備に入る直前での決断でした。

ハリルホジッチ監督が就任したのは2015年3月。2014年のブラジルW杯後、ザッケローニ監督の後を受けたハビエル・アギーレ監督の途中退任を受けてのことです。アギーレ同様、ハリルホジッチもまた欧州やW杯での豊富な経験（LOSCリールを率いてのUEFAチャンピオンズリーグ本戦出場、アルジェリア代表でのブラジルW杯決勝ベスト16進出）を有していました。本田圭佑（ACミラン）、香川真司（マンチェスター・ユナイテッド）、岡崎慎司（マインツ）など欧州で活躍するタレントを多数擁し（所属クラブはブラジルW杯当

時)、攻撃的なサッカーを志向しつつも戦術的な幅をチームに与えることができず、そのためグループリーグ敗退に終わったブラジルW杯のザッケローニ体制。来るロシアW杯の出場権を獲得すると共に、ザッケローニ時代の反省を踏まえた形で本大会で結果を残す。それが、ハリルホジッチには求められていました。

毎日集まってトレーニング可能なクラブチームと異なり、代表チームは年に数十日しか活動期間を取ることができません。アギーレ監督のチームがアジアカップの準々決勝で敗退したことからみても、アジア他国のレベルは急速に上がっており、厳しいW杯予選が想像される中、1年間のタイムロスは大きなリスクでした。ですが最終的には、それまで90分以内で勝利したことがなかった宿敵オーストラリア代表にホームで完勝。最終予選首位通過を決めます。

ハリルホジッチのチーム作りは、当初から激しい賛否両論に晒されてきました。相手によって様々な対策、戦術を準備するため、できるだけ様々な特徴を持った選手を数多く起用していく傾向に対し、「多彩な策を持っている」と評価する者、「一貫性がない」「形がない」と批判する者。用兵上様々な選択肢を必要とし、また戦略上スピードと運動量を兼ね備えた選手を好むことから、必然的に若い才能ある選手たちが抜擢される傾向が生まれま

した。その結果、経験と実績のあるザッケローニ時代の中心選手の起用が相対的に少なくなっている、この点でも大きく賛否が分かれていました。こういった毀誉褒貶の激しくなる傾向は最後まで変わらず、そのこと自体がJFAの不信を招いたのではないかと思われる形跡もあります。

ですが、ハリルホジッチ解任の理由や是非そのものは、本書では問いません。ハリルホジッチの仕事を正面から分析・総括し、後代の戦略的・戦術的検証や知見の積み上げに寄与する。そのような議論を一般向けにまとめあげる。それが本書の目的です。また、世界最大級の国際大会に臨む代表監督の3年間の仕事、本来評価・分析されるべき本戦での結果をまたずしてわずか2ヶ月前に中断され宙に浮いてしまったという今回のケースでは、そのような分析と総括はなおさら強く求められるはずで、

本書の議論では、以下のような2部構成の経路で「日本代表監督」ハリルホジッチの戦術と戦術の実態を解き明かしていきます。

第一部ではまず、W杯出場がリアリティのある目標となった最初の日本代表、「オフトジヤパン」からハリルホジッチに至る日本代表監督の歴史を、その主要な戦術やキーワード、後継体制への申し送り事項（前体制では不足していた、上積みを目指すポイント）と共に

辿り、日本代表監督史の中でのハリルホジッチの位置づけを探ります。

そして、ハリルホジッチが就任するにあたって提唱した「デュエル」「メンタル・フィジカル・タクティクス」といったキーワードについて、本人の言葉を交えながら検討し、それらの戦術的特徴が実際にどのように表現されてきたか、具体的な試合分析を通じて明らかにします。

そういった戦術面での特質を明確にした上で、近年、日本代表の強化において特に追求されてきた、ある戦術面の狙いを探るため、本書の議論は日本代表監督史に回帰することになるでしょう。戦略家としてのハリルホジッチが、日本代表の近年における戦略的課題にきわめて適合した存在であったことが、そこで判明するはずです。

続いて、近年爆発的な進化を遂げている世界のサッカー、その動向をある切り口から概説。そこから、日本代表がキャッチアップを目指してきた「世界」に、ハリルホジッチの「デュエル」「メンタル・フィジカル・タクティクス」がリンクしていたことを示します。以上のプロセスを追うことで、ハリルホジッチの提唱した「デュエル」の真意、志半ばで潰えたその戦略と戦術の根幹を描き出します。

第二部では、日本代表監督としてハリルホジッチが選択した戦略・戦術に対し指摘可能

な問題点を検討。そこに内在する日本サッカーそのものの問題について考え、ロシア以後の展望を問います。さらに、W杯開幕2ヶ月前という異例の時期における解任の理由となった「コミュニケーション」問題について、いくつかの側面から検討を加えます。

以上、最後までお付き合いいただけますと幸いです。

目次

はじめに ハリルホジッチとは何者だったのか？ 3

第一部

日本代表監督・ハリルホジッチの事績

14

第1章

日本代表・試行錯誤の歴史とハリルホジッチ(1) W杯を目指す強化の歴史 16

第2章

ハリルホジッチのプレゼンテーション 21

「デュエル」のすすめ 22

第3章

ハリルホジッチのゲーム(1) 2014年6月30日 29

2014年6月のドイツ代表 30 / 「ハーフスペース」と「5レーン理論」 31

ドイツ代表の戦術と戦術 40 / 攻撃のスクエア・守備のスクエア 44

ハリルホジッチの智略——ドイツのスクエアを破壊し、分断せよ 46

アルジェリア代表の「戦術的デュエル」 53

第4章 ハリルホジッチのゲーム(2) 2017年8月31日 58

日本代表の「戦術的デュエル」⁵⁹ / WGはインサイドで相手CBの前に立て

61

ハーフスペースを奪い、ミドルゾーンを占有せよ⁶⁵

二つの試合から見るハリルホジッチのエリア戦略⁷²

第5章 日本代表・試行錯誤の歴史とハリルホジッチ(2) エリア戦略の展望⁷⁶

岡田武史の日本代表(2007年~2010年南アフリカW杯)⁷⁷

ザッケローニの日本代表(2010年~2014年ブラジルW杯)⁸²

岡田~ザッケ期にみる日本代表強化の「一貫性」⁸⁵

ハリルホジッチの多彩なエリア戦略⁸⁶

第6章 「ボールゲーム」としてのサッカーを解釈する⁹⁰

「ゴール型ボールゲーム」としての特異性⁹⁰

広大なフィールドをどう守るか。人か、スペースか?⁹³

広大なスペースを守るため必要となる「フィールドの仮想化」⁹⁷

多様化する仮想化フィールド 99

より速く、より激しく。トランジション・サッカー化する現代 108

現代サッカー勝敗の鍵、「戦術的デュエル」 109

Intermission 幻のハリルホジッチ・プランを想像する 113

対コロンビア代表へ名将を悩ませるハメス・ロドリゲス問題を活用せよ 114

対セネガル代表へグループリーグ最もハードなデュエルを耐え抜け 121

対ポーランド代表へグループ最強の敵から勝ち点を奪取せよ 132

第二部

日本サッカーにビジョンはあるか？ 146

第7章 ハリルホジッチはロシアで通用したか？（1）戦術家としての優位性 148

第8章 ハリルホジッチはロシアで通用したか？（2）戦術の問題、日本の問題 152

ハリルホジッチの試行錯誤 152 / 一般的3セントラルハーフ論 154

日本サッカーにおける守備の問題 162 / ハリルの選択 164

問題点——3CHの「チェーン切れ」問題 168

戦術の問題、リソースの問題 171／ハリルホジッチの「真田丸」？ 172

第9章 日本サッカーとハリルホジッチ「コミュニケーション問題」という悲劇 174

ハリルホジッチのレガシー 175

「コミュニケーション問題」とは何だったのか？ 179

追い込みきれなかったトレーニングと体質改善 181

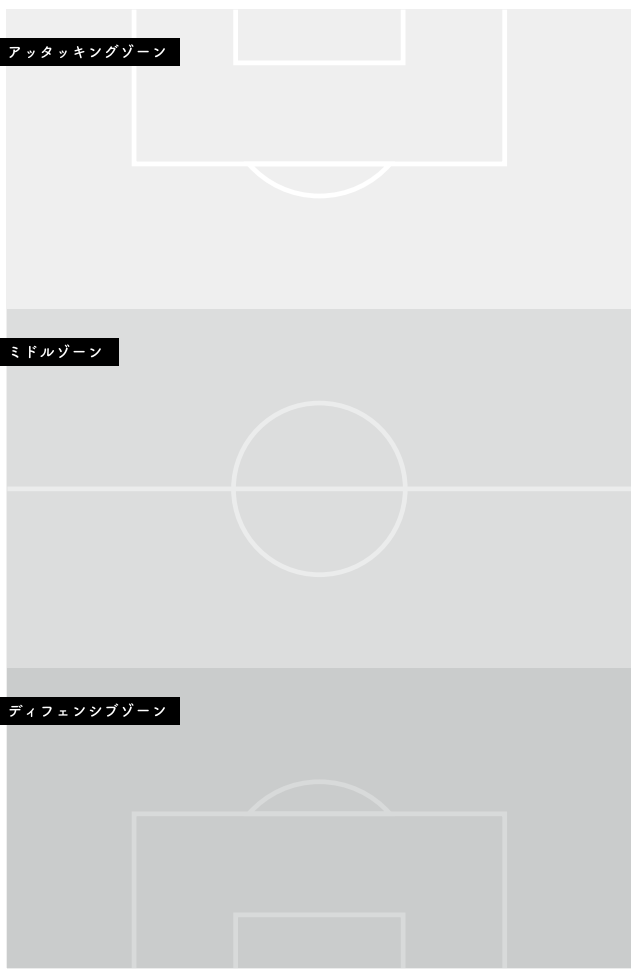
ハリルホジッチのサインを見逃し続けたメディア 184

デュエルは日本人に「合わない」のか？ 186

ハリルの主張……「縦に速く」は本当か？ 187

不可解な人事、組織とのコミュニケーション不全の可能性 193

補遺 1 霜田正浩の証言 197／補遺 2 ハリルホジッチの遺産 220



アタッキングゾーン

ミドルゾーン

ディフェンシブゾーン

ポジションの名称、定義と三つの戦略的ゾーン

ディフェンシブゾーンに基本位置を取るポジション

- **GK** (ゴールキーパー)
ゴールを守る専任の選手。
- **DF** (ディフェンダー)
守備を主任務とする選手の総称。CB、SB、WBなど。
- **CB** (センターバック)
主にゴール前・中央で守備を主任務とする選手。
- **SB** (サイドバック)
4人のDFを配する4バックのシステムで、最終ライン(DFライン)の両サイドを担当するDF。機を見てミドルゾーン～アタッキングゾーンまで上がり、攻撃参加を行う。チーム戦術によって、攻撃参加の頻度や、敵陣のどこまで侵入してどう攻撃に関わるかある程度設定されていることが多い。
- **WB** (ウィングバック)
3人のCBを配する3バックのシステムで、一番外側の両サイドを担当するDF。SBより高い位置をスタートポジションとし、ミドルゾーン～アタッキングゾーンへの攻撃参加とDFラインに入っの守備参加を両立する。守備時には3人のCBのサイドを固めるようタスクを設定されていることが多く、そのため3バックのシステムは結果として両サイドのWBが共に下がって実質5バックとすることがある。

ミドルゾーンに基本位置を取るポジション

- **MF** (ミッドフィールダー)
直接得点に絡むフォワードやアタッカーの選手とDFラインの間、いわゆる中盤にポジションする選手のこと。位置的に攻撃・守備双方を担当する。
- **DH** (ディフェンシブハーフ)
MFの中で、DFラインの前に位置し守備を主任務とするMF。何枚のDHを置くかはチーム戦術、採用するフォーメーション、システムによって異なる。
- **アンカー**
4-3-3や3-1-4-2などのフォーメーションにおいて、DFラインの前に1枚でポジションし、DH任務を行う選手。
- **CH** (セントラルハーフ)
中盤の中央エリアに配されるMFの総称。DHも含む。
- **IH** (インサイドハーフ)
4-3-3や3-1-4-2などのフォーメーションにおいて、アンカーより前のラインでポジションするMF。これらのフォーメーションでは、左右1枚ずつ、2枚のインサイドハーフが配される。
- **SH** (サイドハーフ)
4-4-2や4-2-3-1などのフォーメーションで、左右のサイドを担当するMF。
- **WG** (ウィング)
4-3-3などのフォーメーションで、FWに準ずる高い位置で、左右サイドに開いて両翼からゴールを狙うアタッカー。現代サッカーではそれだけではないタスクが課されることが多くなってきている。
- **OH** (オフENSIBハーフ)
FWなどの近くにポジションし、攻撃面のタスクを主に担うアタッカー要素の強いMF。
- **トップ下**
OHの中でも、中盤の高い位置、FW近くの中央に位置して中盤の低い位置とアタッカーをリンクするようなタスクを担う選手。例えば4-2-3-1だと、3の中央に位置する。

アタッキングゾーンに基本位置を取るポジション

- **FW** (フォワード)
フォーメーションの頂点で敵陣に位置し、敵のCBやDFと直接駆け引きしてゴール前に侵入して得点することを主任務とするアタッカー。
- **CF** (センターフォワード)
特に中央に位置して得点することを主任務とするFW。



ジッチの事績



第一部

日本代表監督・ハリルホ

第1章

日本代表・試行錯誤の歴史とハリルホジッチ（1）

W杯を目指す強化の歴史

まず、ハリルホジッチに至る過去の日本代表監督史を振り返るところから議論を始めたいと思います。

歴代の日本代表監督は、チームは……

要するに、どういうチームだったのか。

監督の狙い、戦術的な特徴は何だったか。

長所は何だったか。問題点は何だったか。

日本サッカーの成長過程としてどんな段階にあったのか。次の段階に向けどのような達成を残し、どのような問題が先送りされたのか。

そういった観点で、わかりやすい検討が可能なよう表を編んでみました。

以下、まずはご覧ください。



ハンス・オフト

(1992～1993)

キャッチフレーズ

トライアングル、アイコンタクト

主な特徴

共通言語としての戦術を持ち込み、
日本人選手個々のクオリティをグループ、チームにまとめた

基本の言語化、グループの戦術的強化素の力を結集レベルに留まった。それが強みであり弱みでもあった。グループとしての強さは個々の選手のクオリティに左右され（戦術的に強固に組織化されていたわけではなかった）、SBが1枚怪我をするだけでもチームの強さに大きく影響を与えてしまうようなもろさがあり、それが最終的に徒となった

主な戦績

1992 アジアカップ 優勝
ダイナスティカップ 優勝
1994 アメリカW杯 最終予選敗退

次への課題

組織力を高め、キープレイヤーが出られなかった場合、極端にチーム力が落ちない戦術化を追求、選手層を厚くしていく



加茂 周

(1994～1997)

キャッチフレーズ

ゾーンプレス、コンパクトフィールド

主な特徴

ヨーロッパ基準の戦術を導入し組織化、戦術化を試みる
新しい世代の選手を抜擢し、層を厚くする

ヨーロッパの戦術をヨーロッパ人が指直接導するわけではなく、コーチング面で弱かった。擬似的なゾーンディフェンスで本来求めるクオリティに達せず、戦局を支配する要素にはできなかった

主な戦績

1996 アジアカップ ベスト8
ダイナスティカップ 優勝
1998 フランスW杯 最終予選途中退任

次への課題

真の意味でサッカー先進国地域であるヨーロッパに追従可能な戦術の導入、組織化



岡田 武史

(1997～1998：第一次)

キャッチフレーズ 一勝一敗一分け

主な特徴

加茂の代表のピンチヒッター、
最終予選突破と本戦を戦う時限的タスクフォースの位置づけ

これまでの様々な要素、強みととれるものを要素的に総括し、「現状認識」というデータの採取可能なチームにした

主な戦績

1998 W杯最終予選第三代表決定戦勝利による突破
フランスW杯 グループリーグ敗退（0勝3敗）

次への課題

真の意味でサッカー先進国地域であるヨーロッパに追従可能な戦術の導入、組織化（加茂期より積み残し）



フィリップ・トルシエ

(1998～2002)

キャッチフレーズ フラット3

主な特徴

欧州基準の知見をトレーニング面含め本格的に導入
戦術的で組織的、規律のあるサッカーを展開した

ユニークな3バックのゾーンディフェンス
同格以下の相手には分厚い中盤の優位性を利用した破壊的なポゼッションサッカー
同格以上の相手には、連動したコンパクトなDFからのショートカウンター
同じシステムを基盤に、様々なレベルの相手に対応可能な戦い方ができるよう発展した

主な戦績

1999 ワールドユース 準優勝
2000 シドニー五輪 ベスト8
アジアカップ 優勝
2001 コンフェデレーションズカップ 準優勝
2002 日韓W杯 ベスト16

次への課題

希求してきた欧州流の組織サッカーで大きな結果をいくつも残したが、組織力、規律を重視しすぎた反省を残す。「組織力」に「個の力」を上乗せすることが求められた



ジーコ

(2002～2006)

キャッチフレーズ

自由なサッカー、自主性、個の力

主な特徴

選手の自主性と個性を重んじるセレクション型、
中盤の選手の技術を重視するブラジル流のチーム

攻撃でも個の質と自主性を重視。守備面ではハイラインとゾーンプレッシングを放棄、ローラインで数的劣位を避ける守備を徹底。組織+個というよりは、組織力を失い自由な個に依存するサッカーに。前体制の上積みをするつもりが、全否定になってしまい、個の力で相手を上回れなければ結果を残せないチームになってしまった

主な戦績

2004 アジアカップ 優勝

2006 ドイツW杯 グループリーグ敗退（1分2敗）

次への課題

組織か、個か？ではなく、その融合を果たすことが求められた



イビツァ・オシム

(2006～2007)

キャッチフレーズ

日本サッカーの日本化、考えて走るサッカー

主な特徴

日本人選手の特徴（とされる）、規律を守る能力、よく走る献身的、攻撃的志向、技術向上への食欲などを活かしたサッカーを目指した

組織（欧州）か個（南米）か？といった不毛な議論、強化方針のブレを、「日本サッカーの日本化」というテーマでアイデンティティの追求に一歩。オシム独自のトレーニングメソッドで躍動感ある攻撃サッカーを実現しつつあった。代表スタッフも全て日本人を差配、「オールジャパン」的布陣だった

主な戦績

2007 アジアカップ ベスト4

次への課題

オシムが病に倒れたことにより、「日本サッカーの日本化」挑戦はいったん挫折。

二度目の登板となり、後継監督となった岡田武史に「日本サッカーの日本化」は託されることになった



岡田 武史

(2007～2010：第二次)

キャッチフレーズ

接近・連続・展開、日本人らしいサッカー

主な特徴

オシムの「日本サッカーの日本化」テーゼを岡田なりに解釈したハイプレス&パスサッカー（前期）
自陣に守備ブロックを引き、カウンターを狙う守備的サッカー（後期、W杯本戦）

「日本人らしさとは何か」を追求し、ラグビーの「大西理論」を援用。ハイプレッシングで相手を追い込みボールを奪い（接近）、狭い地域でパスを回して主導権を得（連続）、オープンサイドにボールを運び一気に敵陣を陥れる（展開）サッカーを目指した。しかし本戦までに思うようなものを実現できず、形としては真逆といってもよい超守備的なサッカーで本戦を戦った

主な戦績

2009 南アフリカW杯 最終予選突破

2010 南アフリカW杯 ベスト16

(国外開催のW杯で初のグループリーグ突破)

次への課題

「日本人らしいサッカー」と見なされたものの実現できなかった、攻撃的なハイプレス&パスサッカーへの再挑戦



アルベルト・ザッケローニ

(2010～2014)

キャッチフレーズ

インテンシティ、エクイリブリオ（攻守のバランス）

主な特徴

ヨーロッパ基準の戦術の再導入による戦術化、モダナイズ
それと日本人選手の「特徴」を活かしたサッカーを高い次元で融合させる、再挑戦

オシム、岡田が目指しながらも挫折した「日本サッカーの日本化」を、岡田のハイプレス&パスサッカーのより高レベルでの継承・実現という形で模索。ザッケローニの戦術家としての高い能力に加え、中心選手が欧州の第一線で活躍していたこともあり、親善試合やコンフェデレーションズカップなどでは強豪国と互角以上に戦えるチームに発展。しかし、本戦では通用せず、一勝もできず敗退した

主な戦績

2011 アジアカップ 優勝

2014 ブラジルW杯 グループリーグ敗退（0勝1分2敗）

次への課題

順調に発展していたはずの「日本人らしいサッカー」がなぜ通用しなかったのか？敗因を率直に分析し、足下を見つめ直してベースを築き直す必要性が実感された



ヴァイッド・ハリルホジッチ

(2015～2018)

第2章 ハリルホジッチのプレゼンテーション

さて、日本代表監督に就任したハリルホジッチ監督が標榜したのは、「1対1のボールの奪い合い」を意味する「デュエル」でした。前章での振り返りを見ていただければわかる通り、歴代の日本代表監督にはそれぞれの目指すコンセプトに根ざしたキャッチフレーズがありました。それらフレーズは、代表強化の指針としてはたらくのみならず、1993年のプロ化を機に猛スピードで成長してきた日本サッカー全体を先導する役目も、良くも悪くも果たしてきたといえます。

1998年フランスW杯を目指した加茂周監督の「ゾーンプレス」。

2002年日韓W杯でグループリーグ突破を果たしたフィリップ・トルシエ監督の「フラット3」。

2010年南アフリカW杯に向け指揮を執ったイビチャ・オシム監督の「考えて走る」「日本サッカーの日本化」、そのあとを引き継いだ岡田武史監督の「接近・展開・連続」。

そして、アルベルト・ザッケローニ監督の「エクイリブリオ（バランス）」「インテンシテイ」。

いずれも、それぞれのチームにとって中核となる戦術そのものや、チームづくりの戦略的な狙いを示すものでした。ハリルホジッチ監督の打ち出す「デュエル」Ⅱ「1対1の戦い」は、それらに比べずいぶんと原始的な地点に戻ってしまったように思われました。

本当にそうだったのでしょうか。ハリルホジッチ監督は、なぜ「1対1の戦い」を強調したのでしょうか。彼の言う「デュエル」には、どんな意図が、意味があったのでしょうか？

「デュエル」のすすめ

ハリルホジッチ自身の言葉を振り返ってみましょう。就任直後の試合から、ハリルホジッチは球際の戦い（「デュエル」）を重要視していました。

球際のところで、もっと激しく、勇気を持って行くように要求している。

このチームには攻撃面でも守備面でも強くなってほしい。映像についても多くの

分析をして、「この部分を向上させる必要がある」ということで選手たちに見せた。メンタル面では、もっと勇氣を持って、もっとアグレッシブに、ということを伝えた。現代フットボールでは、球際で強いかなと試合には勝てない。

ご存じの通り、ハイレベルのフットボールはアグレッシブさと球際（の強さ）が要求される。この3日間、3回のトレーニングをしたが、練習の中でもっともアグレッシブになることを強く要求してきた。まだ球際で強い選手もいるが、このチームに求めたいのは、戦いに対してこちらから応える態度だ。クオリティはあるが、メンタリティや勇氣がさらに高いレベルになってほしいと思う。（ハリルホジッチ

『心の底から勝利を願う』国際親善試合「チュニジア戦前日会見」2015年6月26日 <https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201503260007-sports>、以下引用箇所はすべて「スポーツナビ」許諾済み。なお、表記は一部改めた。また、日付は会見日を示す）

球際の戦い（デュエル）のレベルを上げることがをしきりに要求しています。また、それと紐づく形で同時に「アグレッシブ」「メンタリティ」「勇氣」を強調していました。指揮を執った最初の試合で、ハリルホジッチが真っ先に「フィジカル（デュエル）」「メンタリ

ティ」の重要性を打ち出したのには、大きな意味があります。これらの要素は戦略・作戦・戦術・個々のプレーそれぞれを密接にリンクさせるものであり、この指揮官の中では、単に「気持ちを強く持って戦え」以上の大きな意味を持っています。続くウズベキスタン戦でも、ハリルホジッチのメッセージは明快でした。

この合宿でしっかりアグレッシブさとコンタクトを要求することで、高いレベルのものをを見せてくれた。

（選手には）勇敢さ、大胆さ、自信を持つように言っている。コンプレックスを抱くな、ということも言っている。どんなに強いチームに対しても、勝つことができる、ということを考えないといけない。（ハリルホジッチ『日本はより強くなる』国際親善試合 ウズベキスタン戦

後会見」2015年3月31日、<https://sports.yahoo.co.jp/column/detail/201504010001-spnaw>）

メンタルを高め、デュエルを恐れないことで「どんなに強いチームに対しても、勝つことができる」。これはハリルホジッチが発するメッセージの核心を正面から表していたもの

といえます。

同じウズベキスタン戦後の会見から、さらに引きます。

タクティクスについてだが、（日本は）コンプレックスを抱いている。先に高い位置にプレスをかけに行くように要求しているが、第1ラインと第2ラインの間にスペースを空けていた。今回はトレーニングをほとんどしていないが、ゲームの展開によってウィークポイントをその都度タッチライン際から指示を出して修正した。そして後半、ブロックをわざと下げることによって相手に対して罠を仕掛けた。これがタクティクスだ。相手にこちらに来るように仕向けて、スペースを作らせてからボールを奪って素早くカウンターを仕掛けることで4点が取れた。だからいつも後ろでオーガナイズすること、タクティクスをコントロールすることが重要だ。

間もなく（W杯）予選が始まるが、毎試合準備が必要だ。ブロックを高く保つこともあるだろうし、低く保つこともあるだろうし、その中間もあるだろう。それは

シチュエーションによるわけで、いつも高く保つのは不可能だ。そういったタクティクスのアドバイスをしていく。そうすれば、このチームは自ずと向上する。この2試合では、プレスは高く、ブロックは低く、というのを分けた。前半、（ベンチから見て）逆サイドが戻って来ないという状況はあったが、それもすぐに（選手を呼んで）修正した。良い試合をできたが、今後も修正は必要だと思う。（同前）

「メンタル」「フィジカル（デュエル）」「タクティクス」。この三つが、ハリルホジッチが就任直後の試合にまつわる会見で強調した要素でした。この三大要素を、彼は解任に至るそのときまで一貫して、日本代表そして日本サッカーに求め続けました。

本書第一部では、実際の試合分析や「ボールゲーム」としてのサッカーの特性分析を通じて、ハリルホジッチのメッセージに込められていた実効的なフィロソフィー、実態を明らかにしていきます。その過程で、ハリルホジッチの「デュエル」が、単なる1対1を意味するのではない、優れてタクティカル（戦術的）なデュエルであり、試合の趨勢を決めてしまうほど重要なものであること、その点において「メンタル」「フィジカル（デュエル）」「タクティクス」三つの要素が分かちがたく結びついていたことが見えてくるはずです。こ

のような「デュエル」を「戦術的デュエル」と位置づけ、以降の議論を進めていきたいと思っています。

次章「ハリルホジッチのゲーム」にて、彼が言っていた「どんなに強いチームに対しても、勝つことができる」チームとはいかなるチームか、そのようなチームはどのような試合を実現しうるか、検討します。まずは、2014年ブラジルW杯で彼が率いたアルジェリア代表が大会覇者・ドイツ代表を土俵際まで追い詰めた試合を分析することで、それが具現化される様子を戦略、作戦、戦術面から解き明かしましょう。

・戦略

実際の戦い（試合）に臨む以前に、勝利条件を満たすため大局的に設計しておく方針やコンセプト、運用計画。

サッカーを扱う本書においては、最終的な勝利（リーグ優勝や目標順位の達成、W杯GL突破など）を得るため、1試合単位ではなく複数の試合での結果に結びつくよう準備される計画・コンセプトといった意味で用いる。

・作戦

戦略に基づき、当面の戦いに勝利するため彼我の能力や相対的な優劣などを考慮し設計される計画。複数の戦いにおける計画を関連付けて一個の作戦と成す考え方もある。

本書においては、試合毎における前記性格の計画を指す。

・戦術

作戦実行のため選択される具体策、遂行手段や、問題が起きた場合の解決方法。できるだけ多くの方策を持つておくことが望ましい。

本書においては、試合ごと作戦に基づいて採用される前記性格の方策を指す。

第3章 ハリルホジッチのゲーム(1) 2014年6月30日

本章では、ハリルホジッチ監督が実際に指揮を執った過去の試合を分析します。チームに戦略的・戦術的に与えられていた構造と狙いを読み取り、それらを実行するためにチームに要求されたキープレーを検討することで、ハリルホジッチ監督の戦術家としてのクオリティ、彼が求めていた「戦術的デュエル」の実際と機能が明らかになるでしょう。

最初に取り上げる試合は、2014年ブラジルW杯の決勝トーナメント第1戦、ドイツ代表対アルジェリア代表戦です。ハリルホジッチ率いるアルジェリア代表はこの試合で、準決勝でブラジル、決勝でアルゼンチンを破って優勝したドイツ代表を、まさに土俵際まで追い詰めました。この大会のベストマッチとも評され、ハリルホジッチの傑作といえる試合です。

2014年6月のドイツ代表

この大会でドイツ代表は攻撃時は4-3-3、守備時は4-1-4-1（4-4-2）となる形を基本フォーメーションとしていました。状況に応じて4-2-3-1、4-4-2さらに3バックのシステムも使えるこの代表は、低迷期にあった90年代末以降、ドイツサッカー協会が推し進めてきた変革——ドイツ人選手の伝統的な長所であるフィジカルの強さやスピードに加え、質の高いボールテクニック、高度な戦術理解力も備えた新世代の選手を育成し代表に送り込む——が実を結んだ、大会最強と言って差し支えないチームです。

この大会では、監督のヨアヒム・レーヴは基本戦術にいくつかの調整を加えていました。

- ・ コンセプトのひとつであるハイプレッシングを仕掛ける頻度を抑制する。
- ・ それによって、相手のディフェンスライン（以下DFライン）やミドルゾーンでボールを持たれる（そこでボールを奪ったり、相手のパスワークを抑止できなくなる）可能性が高まるため、4バックを2人のSBと2人のCBという本来の構成ではなく、CBを本職とする選手を4人配し4CBともいべきDFラインにすることで、

ミドルゾーンを突破してきた相手の攻撃を阻止する見込みを高める。

- ・ 当時、国内リーグ（ブンデスリーガ）のバイエルン・ミュンヘンを率いていたジョゼップ・グアルディオラ監督の戦術を取り入れたＳＢのＣＨポジションへの移動によるフォーメーションチェンジを主要な選択肢から外す。

大会当時、現地は予想よりも暑く湿度が高いという気候条件でした。これを考慮しての変更とされています。そうした変更を行ってもチームの機能性は落ちるところか、むしろ試合当日の気候条件に最適化された効率的な組織と攻守のバランスを実現していました。彼らの戦術を詳細に分析したハリルホジッチは、２０１４年６月におけるドイツ代表の堅牢な構造を、どのように叩こうとしたのでしょうか。まず、ドイツ代表とハリルホジッチの死闘を理解するために欠かせない、二つのキーワードを知ることから始めたいと思います。それは、「ハーフスペース」と「５レーン理論」です。

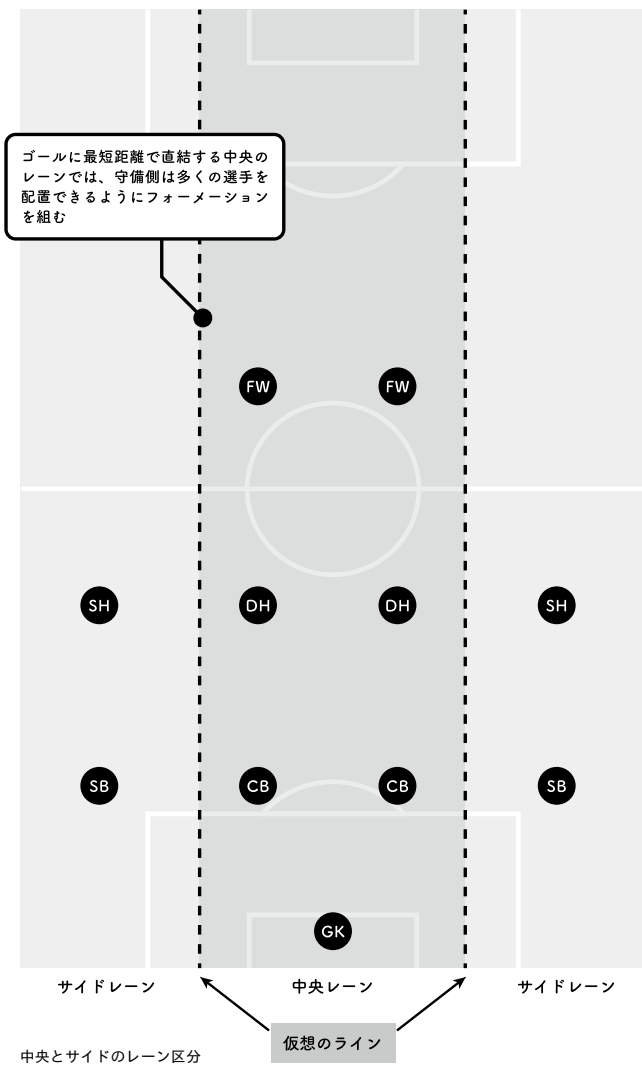
「ハーフスペース」と「５レーン理論」

現代サッカーは高度に戦術化・組織化されています。その一端をなす考え方が「５レー

ン理論」、その中で特に重要とされる概念が「ハーフスペース」です。

これらは、ピッチ（フィールド）をどのように線引きして分けし、チームとしてスペースの戦術的な認知、理解を共有するか、といった課題に関わるものです。シンプルに、かつ戦術的な効果を伴うようフィールドを区分できれば、チームプレーの中で「誰がいつどこにいるか」を選手それぞれが容易に把握できるようになりますし、相手ゴールに迫る／自ゴールを守る上で有効なエリアを明快に意識できるようになり、攻守両面でのグループワークがスムーズになります。それは、よどみない作戦行動をチーム全体で連動して行うための前提ともいえるでしょう。戦術的に、効果的にプレーするには不可欠なものです。

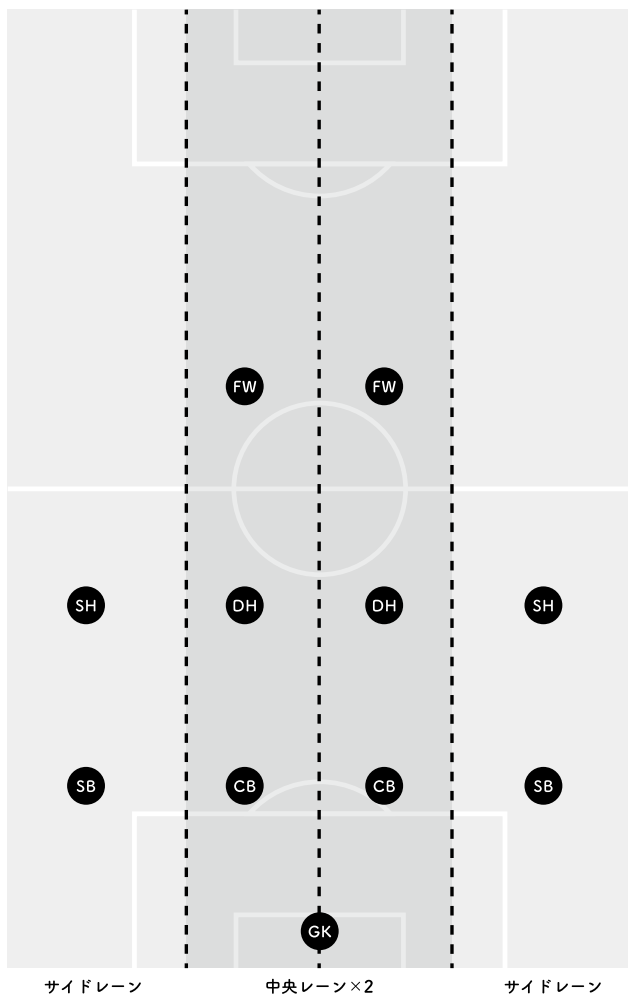
「5レーン理論」理解のため、まず次のような極々シンプルなフィールド区分を考えてみます。両ペナルティボックス（以下BOX）両端から仮想のラインを引きます。すると、中央のレーンとその両側からタッチラインまでを含むサイドのレーンができあがります。守備戦術的には、最も危険なゴール前を占める中央のレーンにおけるディフェンスの密度、強度、有効性を高める必要があります、守備側はここに多くの選手を配置して、攻撃側から時間、スペースを奪おうとします。



現代サッカーで標準となる4バックのDFラインを運用する上での効果を考え、中央のレーンを二分する4レーンのフィールド区分も生まれました。

この区分はやはり現代サッカーの標準的守備戦術である、4バックのゾーンディフェンス（以下ゾーンDF）の運用に適しています。4-4-2のフォーメーションが各レーンにぴたりと収まります。ゾーンDFの簡単な解説はのちの章にて行いますが、各ポジションの選手間で「誰がどこにいるか」把握しやすく、容易に連係を図れそうであるのが見るからにわかると思います。

一方、攻撃時のことを考えると、この区分に従っていき詰まることも想像に難くないでしょう。攻撃もまた、まずゴールに直結する中央を攻略することを最優先にたぐられるわけですが、中央の2レーンは守備が分厚い。そこを避け、ゴールから遠ざかることに甘んじサイドへ移動しても、やはり4レーン区分によって連係の取れた守備網が待ち構えています。



サイドレーン

中央レーン×2

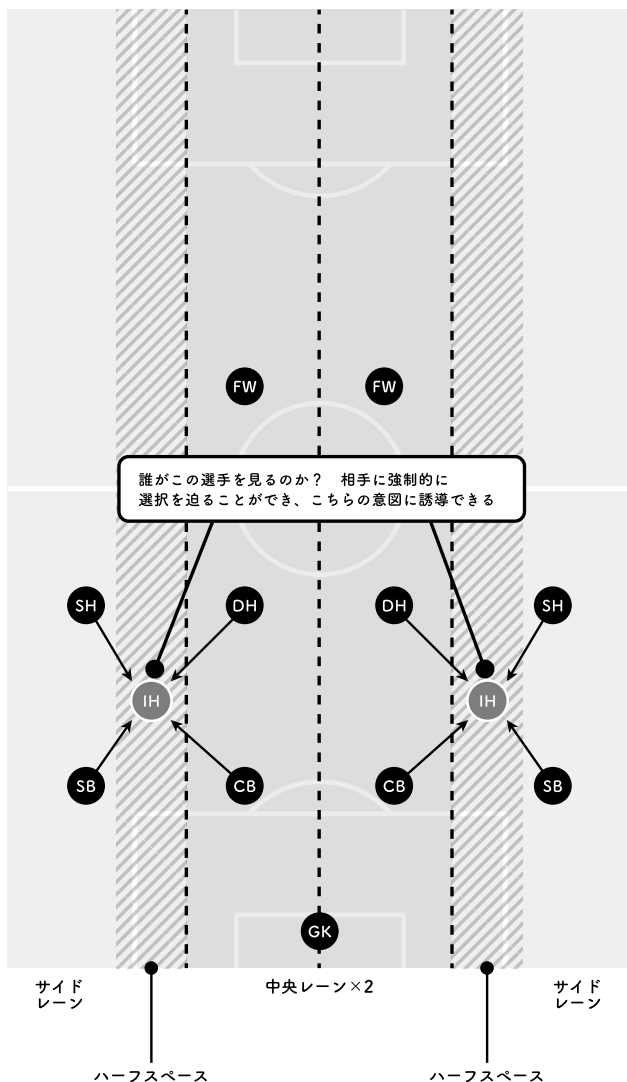
サイドレーン

4 レーン区分

こういった問題を解決するため、中央とサイドのレーン間に、もうひとつの仮想のレーンを引き、都合五つのレーンが設定されるようになります。相手の中央とサイドの守備組織間を縫うようにスペースを想定。ここを使うことで、中央とサイドのDFに、どちらがこちらのアタッカーを見るべきか選択を迫ることができます（次ページ図参照）。

ご覧の通り、ゴールに近いところでこのスペースに入ることができれば、中央よりはプレッシャーが薄く、サイドよりはゴールに近いため、比較的猶予を持ってゴールに直結するプレーを選択できます。守備側にとっては大きな脅威となるため、何らかの対応をしなければならず、攻撃側はそれをあらかじめ想定し、利用できるのです。

例えば中央のDFを引き付け、動かすことができれば、中央のレーンに味方が使うスペースを生み出すことができます。サイドのDFを動かせれば、サイドでフリースペースを得、そこから中央への攻撃を余裕をもって行えます。



ハーフスペースを加えた5レーン区分と、
サイド・中央レーン間への侵入

このように相手DFに難しい対応を迫りつつ、プレーしやすいスペースを得るだけではありません。このレーンを効果的に占めることができた場合に、攻撃側が確保できる可能性をより具体的に見てみましょう（次ページ図）。

前述の通り、よりゴールに近くプレッシャーの薄い場所で、中央もうかがえ、サイドも使えます。チームとしてこのスペースを戦術的に活用する意図があれば、ここから味方と関係しながら、図のようにサイド、中央と、相手を動かしながら様々な攻撃が可能になります。味方を使うだけではなく、それを囫に自らがゴール前に侵入し決定的なプレーを狙うこともできます。敵にとってきわめて危険な場所で、攻撃面での選択肢を最大化できるのです。

- 相手に選択を迫ることにより、守備陣形を動かし、自らはサイド、中央と様々な選択肢を持てる
- 味方との連動で敵ゴール前でのパスコースを最大化し、かつ自らBOX内に持ち込むこともできる



中央レーン×2

サイド
レーン

ハーフスペース

ハーフスペース

ハーフスペースで最大化できる選択肢

中央、サイドに続くこのような第三の仮想のレーンを「ハーフスペース」と呼び、ハーフスペースを含んだフィールド区分によって攻守両面で様々な戦術的效果を得ようとする考えを「5レーン理論」と呼びます。既に記しましたが、2014年当時バイエルン・ミュンヘンを率いていたジョゼップ・グアルディオラ監督によってきわめて効果的に用いられ、現在では新たな戦術的スタンダードとみなされつつある概念であり、理論です。ブラジルW杯のドイツ代表も、この理論に基づいて戦術を組み立て、プレーしていました。これらを踏まえた上で、ハ ril ホジッチが立ち向かったドイツ代表の戦術を検分してみよう。

ドイツ代表の戦略と戦術

この大会に臨む上でドイツ代表の採った戦略方針を改めて確認します。

- ・ 当時の気候条件を考慮し、敵陣におけるプレッシングの頻度を減らすことで、運動量やフィジカル面での消耗を避ける。
- ・ ハイプレッシングを減らすことで守備面で問題が起こることが想定されるが、シス

テムやゲームモデル、人選の変更など戦術レベルの調整で対応する。

目的は、長期にわたるトーナメントを通してパフォーマンスを発揮できるようにすること。その方針にのっとり、本章の冒頭に記したような戦術面での調整が行われた結果、ハルホジッチのアルジェリアと対する決勝トーナメント第1戦では、次のような狙い、やり方でまとまっていました。

- ・ 4-3-3で攻撃し、4-1-1-4-1で守ることで、攻撃↓守備、守備↓攻撃時の移動をシンプルにし、トランジションを効率的に行い体力を温存。
- ・ 中央、サイド双方に関われる機動性の高いCFを起用。
- ・ ワイドにも張れるが、インサイドに入ってゲームメイクにも関われるタイプのインサイドWGを起用。
- ・ 攻撃的なMFとしても守備的なMFとしても振る舞えるインサイドハーフを起用し、DFライン前で孤立しがちなアンカーをサポートしながら攻撃する。
- ・ 4人のCBによる4バック。SBはサイドのシンプルな上下動に専心し中央の封鎖

効率と相手のサイドアタックへの耐久性を確保する。

- ・ ゴールに直結する攻撃を受けるのを避けるため、中央からの攻撃をできる限り避け、サイドからビルドアップ（敵陣にボールを運ぶ）する。

- ・ 中央を固めつつサイドを中心に攻撃するというやり方を効果的に行うため、5レーン理論を採用し、ハーフスペースを最大限活用する。

- ・ アルジェリアは4バックを採用しているため、ハーフスペースを使った攻撃が有効なはずである。



● ボール保持時：4-3-3

● ボール非保持時：4-1-4-1

アルジェリア戦におけるドイツ代表のフォーメーション

これらの狙い、やり方を組み合わせることにより、ドイツ代表の戦術的アクションには次のようなきわめて特徴的で機能的な仕組みが現われていました。

攻撃のスクエア・守備のスクエア

次ページの図をご覧ください。採用した戦術、個々の選手のアクションによってドイツ代表のピッチには、ハーフスペースを中心軸に、それぞれスクエア（四角形）をなす四つの仮想エリアが形成されていることがわかります。

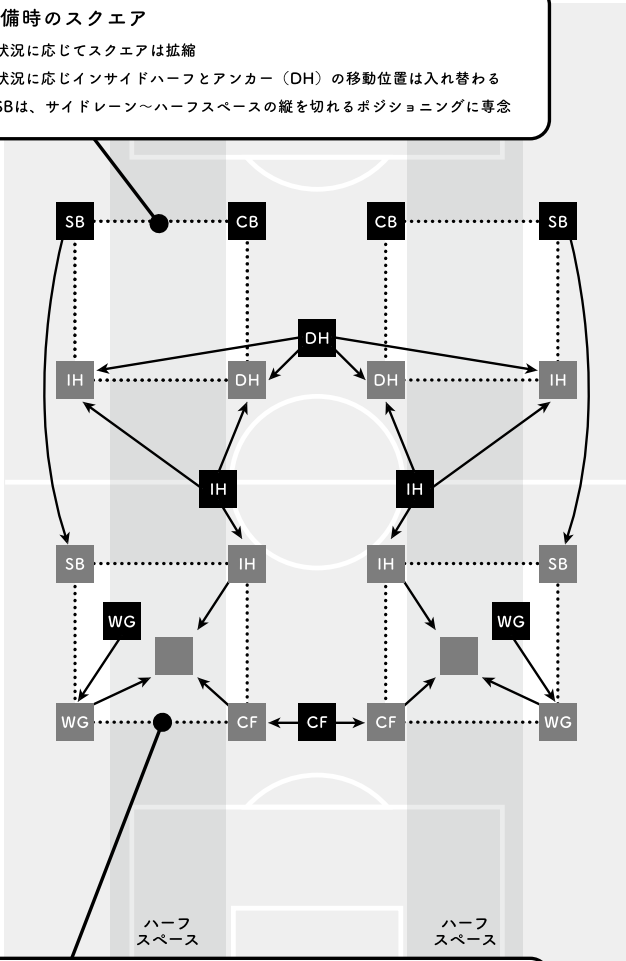
敵陣に形成されるスクエアでは、4人でボールを保持しながら適時ハーフスペースを使いボールをゴールに向かって運びます。あるいはハーフスペースを使うアクションを図にしてアルジェリアのBOXサイド、BOX内への侵入をうかがう、そういった表裏の仕掛けができています。翻って自陣では、やはりスクエアを形成することで、サイドエリアに入ってくる敵に対しあたかも包囲網を敷くかのような防御が可能になっています。

守備時のスクエア

- 状況に応じてスクエアは拡張
- 状況に応じてインサイドハーフとアンカー（DH）の移動位置は入れ替わる
- SBは、サイドレーン～ハーフスペースの縦を切れるポジショニングに専念

- 守備時のスクエア**

 - 状況に応じてスクエアは拡張
 - 状況に応じてインサイドハーフとアンカー（DH）の移動位置は入れ替わる
 - SBは、サイドレーン～ハーフスペースの縦を切れるポジショニングに専念



攻撃時のスクエア

- 状況に応じてスクエアは拡張
- 状況に応じてインサイドハーフとCFの移動ーは入れ替わる
- SBはサイドレーンでの移動に専念し、ハーフスペースに侵入しない
- CF・WG・インサイドハーフのうち誰かがスクエアの中央（ハーフスペース）に入っていき、ラストプレーへの起点作りを行う

- 攻撃時のスクエア**

 - 状況に応じてスクエアは拡張
 - 状況に応じてインサイドハーフとCFの移動ーは入れ替わる
 - SBはサイドレーンでの移動に専念し、ハーフスペースに侵入しない
 - CF・WG・インサイドハーフのうち誰かがスクエアの中央（ハーフスペース）に入っていき、ラストプレーへの起点作りを行う

これが、この大会におけるドイツ代表の強力で再現性の高い攻撃と守備を両立させる、戦術的な堅牢性の核心でした。レーヴ監督の戦略通り、フィジカル面での消耗を抑制しつつ攻守のバランスを整えたチームになっていたと言えます。

しかし、ドイツ代表が大会に入って行った戦略レベルの変更も、戦術上の仕組みもハリルホジッチには見えていました。レーヴのプランには綻びの種が潜んでおり、彼は巧みにそれを隠していましたが、そのメカニズムを見抜いたハリルホジッチのプランにより手痛く暴露されることになります。

ハリルホジッチの智略——ドイツのスクエアを破壊し、分断せよ

ドイツが仮想的に形成するこの二つのスクエアをいかに崩し、機能不全に追いやるか。ハリルホジッチの戦略は、そこに絞られていました。

レーヴがこの戦略・戦術、フォーメーションを用いているからこそ、どうしても手薄になってしまうスペース、局面が存在します。彼は望むリターンを得るため、それらのリスクを甘受する形で大会に臨んでいました。レーヴのリスクテイクをいかなる手段で、致命傷を与えうる形でいかにあぶり出し手に入れるか、ハリルホジッチは分析を重ねていたの

でしょう。結果としてアルジェリアは、ドイツが使いたいと考えていたハーフスペースを逆に使って反撃し、ドイツゴールを脅かすことになったのです。

それでは、レーヴのドイツ代表を追い詰めた、ハリルホジッチ・プランの概要、方法を分析してみましょう。

49 ページの図をご覧ください。

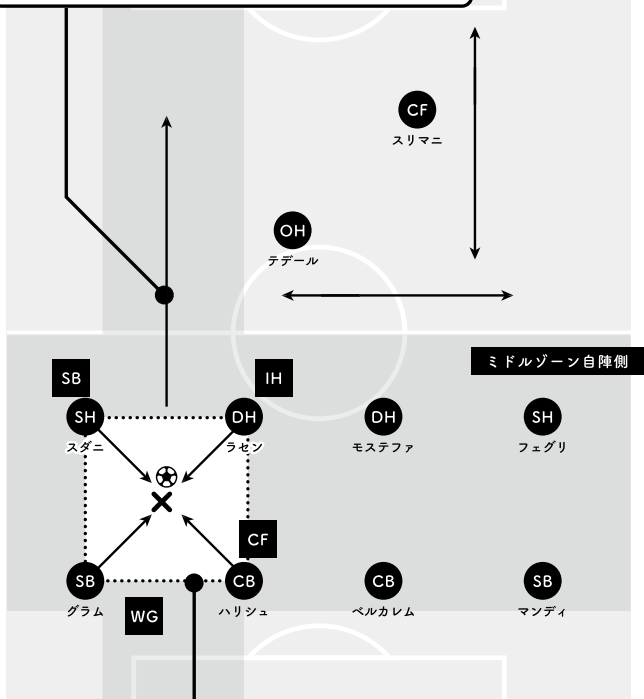
ハリルホジッチは、ドイツ代表がアルジェリア陣に形成したいスクエアに対応した、S・H・S・B・D・H・C・Bによるスクエアを形成、1対1でプレッシングをはめ込めるよう準備をしていました。ドイツのC・F、I・H、W・G、S・B個々にプレッシャーをかけると共にドイツ側が起点を作ろうとするハーフスペースに対し強烈な圧力をかけ、図×印に入るボールを奪うことが意図されています。

意図通りボールを奪えばその瞬間、ボールロストしたドイツの選手に対してアルジェリア側は2対1、もしくは3対1の数的優位を得られます。ドイツ代表は失ったボールに対し即時カウンタープレッシングをかけてきますが、この数的優位を活かし、準備されたパスワークでボールをキープ。がら空きになっているドイツ陣側のハーフスペースを陥

れるよう待機しているSHにボールを託します。SHは前を向ける状態であればそのままハーフスペースを駆け上がります。前を向くのが難しければ、ドイツ陣、アンカー周辺のスペースで待つCFもしくはトップ下と連係してボールを動かして、前を向きます。CFとトップ下は、帰陣するドイツのIHやアンカーを引き付けつけてハーフスペースを駆け上がるSHの動きをサポートし、自らも素早くドイツのBOXへ迫ります。ドイツ陣のハーフスペースを陥れるのはここではSHとしていますが、状況に応じCF、トップ下もそのタスクを遂行します。奪ったボールを再展開する起点の位置によって、例えばCBにボールを逃がした場合などはロングボールを直接、ドイツ陣深く蹴り込む選択肢もありました。ドイツ代表が武器にしていたGKノイアーの守備範囲の広さを逆手にとって、彼を釣り出し好機につなげようとしていたと思われます。

③奪ったボールを、ドイツが使おうとしていたハーフスペースを逆用して反撃

④スリマニとテデールはここを駆け上がる味方（主にSH）と連携してラストプレーにもちこむ



①ドイツ側が形成するものに対応したスクエアを形成
1対1でハメ込む

②ドイツ側が起点を作ろうとするハーフスペースに対し
強烈な圧力をかけ、ここ（図×印）に入るボールを奪う

●ボール保持時：4-2-3-1

●ボール非保持時：4-4-1-1 ~ 4-5-1

アルジェリア代表のフォーメーションと、戦略的なプレーエリア設定

この反撃を成り立たせるため、ハリルホジッチは事前に三つの手段を用いています。一つ目は、守備ブロック全体を自陣に引き、ミドルゾーンの自陣側を主要なプレッシングゾーンとすること。二つ目は、CFのスリマニ（当時はスポルティング所属）に、裏を突いたり、裏を突くと見せかけてバイタルエリアに引かせたりなど、ドイツCBと駆け引きさせること。さらに三つ目、自陣からのロングボールをスリマニの動きに合わせて放ち、ドイツのDFラインを強制的に下げること。

これよって、ドイツ代表のアタッカーとインサイドハーフを自陣に引き寄せ、かつそのDFラインを上下に操作することによって彼らの陣形全体を間延びさせ、攻撃スクエアを形成したいエリアと守備スクエアを形成したいエリアを分断します。前記したドイツ代表の仮想スクエア図をここでご覧いただければ、この分断によって攻撃・守備のスクエア共に自壊することがわかれると思います。両スクエアの重要な頂点を構成するインサイドハーフ（もしくはポジションチェンジでここに入る選手）の動きがバランスを崩され、敵陣側か自陣側どちらかに引つ張られてしまうからです。

これらの戦術的なアクションは、最終的に次のような状況を生み出します。

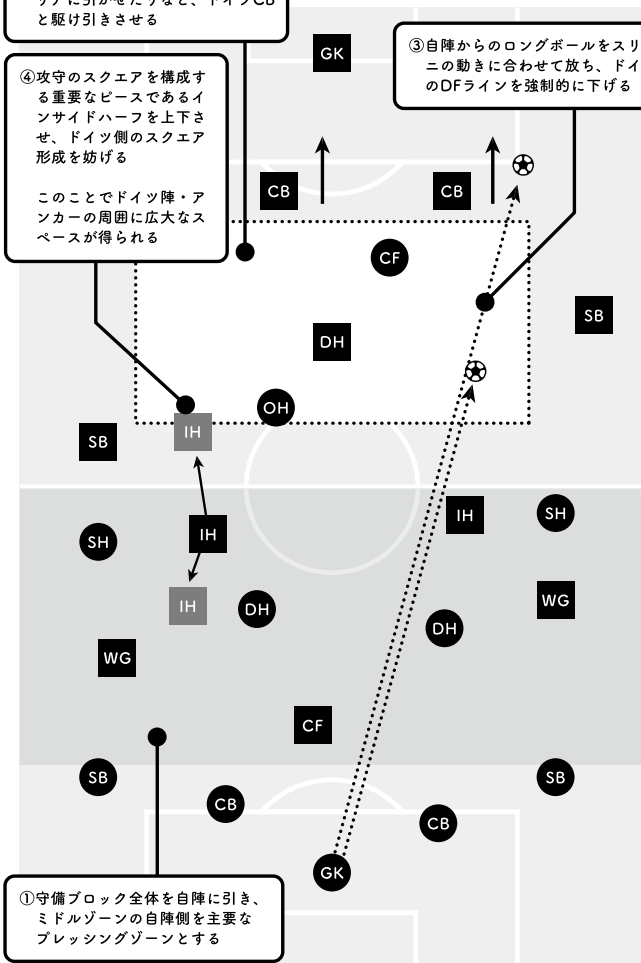
②CFのスリマニに、裏を突いたり、裏を突くと見せかけてバイタルエリアに引かせたりなど、ドイツCBと駆け引きさせる

④攻守のスクエアを構成する重要なピースであるインサイドハーフを上下させ、ドイツ側のスクエア形成を妨げる

このことでドイツ陣・アンカーの周囲に広大なスペースが得られる

このことでドイツ陣・アンカーの周囲に広大なスペースが得られる

③自陣からのロングボールをスリマニの動きに合わせて放ち、ドイツのDFラインを強制的に下げる



アルジェリア代表によって作られるドイツ陣の広大なスペース

4-3-3 (4-1-4-1) の泣き所である「アンカーサイドのスペース」が暴露されるだけでなく、その周囲に広大なスペースが形成されます。それは、ドイツの攻撃スクエアを崩して奪ったボールを受けポストプレーを行ったり、ロングボールを利用したりしてドイツCBと駆け引きをするCFスリマニに大きな自由が与えられることをも意味し、そのことでドイツのハーフスペース戦略を逆用するアルジェリアの反撃はより容易に、よりスピーディになります。

このような構造を備えたスピーディな反撃で、アルジェリアはドイツの守備陣の準備が整わないうちにドイツゴールを脅かすことに何度も成功していました。この反撃が成立するということは、既述の通りドイツ側の狙いが機能不全にされているということです。GKノイアー（バイエルン・ミュンヘン）の見事な対応やアルジェリア側の仕留めのミスがなければ、続く準々決勝ではフランス、準決勝では開催国ブラジル、決勝ではアルゼンチンという強豪中の強豪を次々に下して大会を制したドイツ代表は、このベスト16で姿を消していたかもしれません。

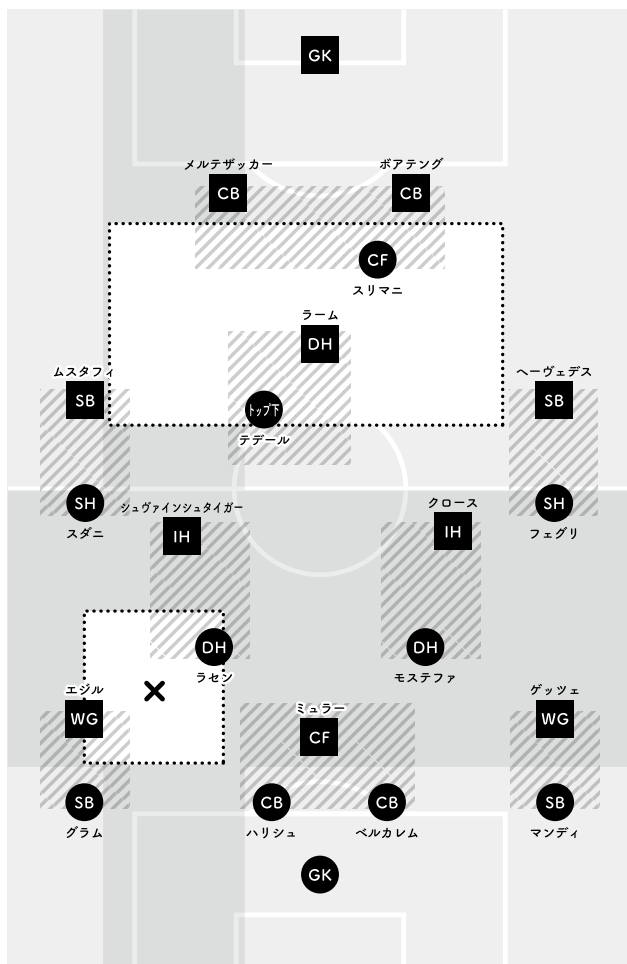
アルジェリア代表の「戦術的デュエル」

ここで、主導権をアルジェリア代表にもたらしたこの試合のハリルホジッチ・プランにとって、どのような「戦術的デュエル」が重要だったか、確認してみましょう。既にあげた図中に、戦術的デュエルが要求されたポイントを追記してみます（55ページ図）。

ドイツ代表の攻撃スクエアを潰しに行くSH・SB・DHは、ドイツの攻撃陣に自由を与えないデュエルが要求されています。それができてはじめて、人数的、状況的に受け手の準備が不十分なまま、ハーフスペースにボールを出してしまうという事態へと、ドイツを追いやるができます。そのボールを奪ったあと、再奪取されないボールキープのデュエルも求められます。前述の通り、ドイツ代表はボールを奪い返すためカウンタプレッシングをかけてきますから、例えばアルジェリアの左サイドSHスダニ（ディナモ・ザグレブ）はそのコンタクトに耐え、ボールを持って前を向くか、同サイドで対ドイツスクエアを組んでいるCBハリシュ（アカデミカ・デ・コインブラ）、SBのグラム（ナポリ）、DHラセン（ヘタフェ）らにクリーンなボールを落とし、反転してドイツ陣のハーフスペースに走り込むことが求められていました。この4人それぞれがドイツ代表とのコンタクトプレーに正面から応じるだけでなく、必要であればパスワークを駆使してドイツのカウン

タープレッシングをかわし、グループでボールキープして敵陣に生じるスペースへ素早くボールを送り込まなければなりません。

この「戦術的デュエル」にしくじると、ドイツ陣アンカーサイドで待つスリマニにボールを託せず、戦略上決定的な起点を得られなくなります。そのスリマニは、ドイツの両CB（ボアテング、メルテザッカー）、アンカーのラーム、ラームのサポートに戻ってくるインサイドハーフ（クロース、シュヴァインシュタイガー）とのデュエルを凌ぎ、ボアテングらの裏に出るか、ハーフスペースを駆け上がるスダニや逆サイドのSHフェグリ（アルメリア）にボールを供給してラストプレーにつなげることが求められていました。



アルジェリアの戦略的プレーエリアと戦術的デュエルのポイント

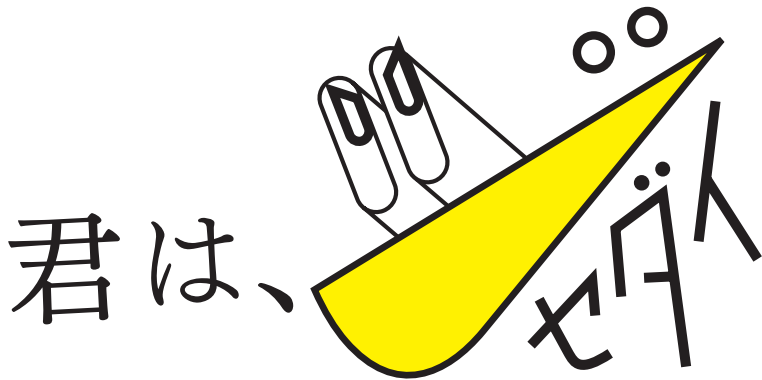
本當に、このような「正面衝突」が必要だったのか？ アルジェリアにとって、個の力において自らを上回るドイツ代表のスター選手たちとの直接対決を避ける戦略の模索、採用という選択肢はなかったのでしょうか。

そのような選択肢はないのです。あつたとしても二義的なものだったでしょう。なぜなら、ドイツ代表の戦術、やり方、その骨格を直接叩くところこそが勝利への最短・最善の方法だからです。なぜ、それが最短・最善なのか。骨格を叩くことができれば、こちらの手筋に対して相手が取り得る応手の選択肢を狭めることができます。強いチームであればあるほど強固な戦略・戦術的な骨格を備えており、だからこそそれを容易に別の骨格に置き換えることができないからです。

ハリルホジッチはこれらの「戦術的デュエル」に耐え抜くことが、ドイツ代表という最強の骨格を持つ敵に勝つ大前提となると、選手たちに伝えていたはずで、敵の強大さにひるまないメンタル、その戦いに耐えるフィジカルが必要だと。そのデュエルを活かすソリューションとしてのタクティクス（戦術）は、既に用意してある、と。

就任以来、日本代表にも重ねて向上を要求していた、「メンタル・フィジカル・タクティ

クス」。ハリルホジッチは同じ要件を、アルジェリア代表にも求めていたことでしょう。アルジェリアの選手たちはそれに応え「戦術的デュエル」をやり抜き、覇者となるチームを土俵際まで追い詰めたのでした。



君は、

何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!